

島へ免許を取りに行く

星野博美

集英社インターナショナル
ウェブ立ち読み

はじめに / オリンピックの呪い

二〇一〇年初頭、私は何年かに一度の周期でやってくるピンチに見舞われていた。ここ二、三年で築いた人間関係がズタズタに壊れたのだ。

原因を作ったのは多分、自分自身なのだろう。私は被害者ではなく、きっと加害者でもある。それは一応自覚している。

私はもともと交際範囲があまり広くなく、社交的でもない。知り合う機会のある人はどうしても同じ業界に偏なやってしまう。しかし仕事で関わる人とあまり親しくなりすぎると、いざという時正しい行動がとれなくなるし、簡単に癒着する。仕事関係者との距離には、あまり親しくなりすぎず、離れすぎず、という細心の注意を払ってきたつもりだった。

ところがここ数年、人ともっと関わりを持ちたいという欲求がなんとなく強まっていた。要するに「友人」とか「知り合い」とか「仕事関係者」ではなく、「友達」が欲しくなったのだ。そしてこれまで自分の中で守ってきた距離感を崩した。頻繁に酒を飲みに行ったり、観劇や野球観戦、長年封印していたカラオケにも行くようになった。ただの友達ならそれでよかったが、仕事状況が複雑にさせた。仕事上で意見が対立すると亀裂は一気に深まった。

「友達だと思っていたあなたから、なぜそこまで言われなければならないのか？」

ある人はそんな捨て台詞どやごを残し、またある人は一方的にシャッターを下ろして音信不通になり、

数人が目の前から去っていった。

ちょうど同じタイミングで、生まれた時から世話をしていた愛猫、ゆきを亡くした。一六歳と一〇か月だった。

人間関係で憔悴^{しやうすい}する私に歩調を合わせるかのように、ゆきはみるみる衰弱していき、まるで私が背負った面倒な荷物を肩代わりするように旅立っていった。

しばらくは何も手につかず、テレビでバンクーバー・オリンピックばかり眺めていた。

だいたい私はオリンピックの時にろくなことがない。オリンピックの呪いとも呼びたいくらいだ。北京もそうだった。一番ひどかったのはアテネの時だ。その時はゆきの母親、しろを失い、やはり時を同じくして人間関係が立ちゆかなくなつた。この時は四〇歳を前にした憂鬱^{うつ}と重なり、回復するまでにかかりの時間を要した。落ちた状態は意外なほどあとを引き、二年後のトリノの時もテレビでオリンピックばかり見ていた。そしてしまいは腰痛を発症し、一人で暮らしている気力と体力が著しく低下したことをようやく認識して、実家へ戻る決心をした。

ということは、夏か冬にオリンピックが開催される二年ごとに悪い波がやって来るわけで、ほつとひと息つけるのは奇数の年だけなのかもしれない。

いや、そんな悠長なことは言っていられない。奇数の年にトラブルの種を撒き、偶数年にトラブルが収穫期を迎えているのかもしれない。結局毎年、ろくでもない年なのかもしれない。

私は普段、占いの類を極力見ないようにしている。信じていないというより、その暗示にとりこまれるのが怖いからだ。けれど占いなど見なくとも、何か流れが悪くなっていることはうすう

す感じていた。

「どうも流れが悪くなってる感じがする」

スピリチュアルな世界に傾倒する友人にポロリとこぼしたところ、「月と星の位置が悪い」「清めが足りない」「霊視さんに見てもらったら？」と言われた。

そんなことを信じたような時期もかつてはあったのだが、その時私は強烈な違和感を抱いた。ゆきが倒れてから亡くなるまでの半年間、私は動物病院とペットショップ以外にはほとんど出かけず、家で看病に徹した。ゆきが衰弱したのはてんかんの発作と老齢による体力低下であり、月や星のせいなどでは絶対にならない。友人たちが去っていったのも、自分の迷いが混乱を生んだことが原因であり、天体の位置とは関係ない。月や星や、前世の因縁にゆきを殺されてたまるか。いまさら部屋じゆうに盛り塩をしたり、お祓い（はら）をしてもらったりしたところで、ゆきの魂が帰ってくるわけでもなければ、人間関係が改善されるわけでもない。

何かをきっかけにこの流れを断ち切りたい。しかし超自然のパワーに頼るのではなく、自分の力でそうしなければ、半年間、必死で病魔と闘ったゆきに申し訳が立たない。

ゆきの死が、結果的には私を迷いから救ってくれたのだった。

何かまったく新しいことに挑んで、余計なことをくよくよ考える暇もないほど疲れたい。脳も体も神経もくたくたにしたい。ちょうど子どもの頃、逆上がりや自転車が漕げるようになるまで、何週間も校庭開放に通い、必死で練習した時のように。

抽象的な目標ではなく、手が届かなそうで届きそうな、具体的な目標が欲しい。それを達成できたら、この先も少しがんばれるような気がする。

車の免許でも取ろうかな。

ぼっと頭に浮かんだ。

若い頃、免許を取りたいと思ったことは一度もなかった。特に学生時代は車とかドライブといった単語を聞くと、「ケツ！」と馬鹿にしたいような気分だった。私が通っていた大学は、郊外で広大な駐車スペースが校内にあったこともあり、これ見よがしに車で学校に来る学生たちがいた。バブルの足音が聞こえ始めた一九八〇年代半ば、学生がいい車を乗り回すなどというのは当たり前前の風景だった。そんな学生を見るたび、「ブルジョワ学生め！」と目の敵かたみにしていた。車ごとで人生が豊かになったり見聞が広まったりするものか。私は免許を取る二、三十万ものお金があったら、一回でも多く旅行に行きたかった。

思想的な傾向は別にして、自分の運動神経に大きな疑念を抱いていたことも免許を取らない理由の一つだった。

親が心配するのでこれまでひた隠しにしてきたが、実は自転車で四度事故に遭ったことがある。一度目は通学途中で大通りに飛び出し、バスと接触。横に投げ出されたことでひかれずに済んだ。

二度目はカーブを右に曲がりそこね、たまたま通りがかかった軽トラックと正面衝突。体がぼー

んと路上に放り出されたが、互いにスピードを出していなかったため、全身にあざができる程度で済んだ。

三度目は会社勤めをしていた時だが、完全に自滅で、やはりカーブを右に曲がりきれず、壁に激突。どうも私は右方向に弱いらしい。膝から流血する程度の軽傷だったが、あまり会社へ行きたい気分ではなかったので、ケガを口実に半日会社をサボった。

そして四度目は自分の過失ではないのだが、夜中にマウンテンバイクに乗っていたところを良からぬ少年二人に追いかけられ、悪ふざけで体当たりされて商店のシャッターに激突した。目の周りと膝にしばらくあざが残り、ケガとしてはこれが一番痛かった。

これだけ事故を起こしていずれも軽傷で済んだのは、運がいいのか悪いのかよくわからないが、自転車に限ってはあまり慎重なドライバーではなかった。自分はあまり乗り物には乗らないほうがよさそうだという自覚があった。

いま思えば、最初に免許のことが頭をよぎったのはトリノ・オリンピックの頃だ。当時は武蔵野市のアパートに暮らし、目が覚めると夕刊を読み、朝刊を読んでから寝るといふひどい生活を送っていた。夕刊を読み終えると、サンダルをつっかけて近くのコンビニへ牛乳を買いに行く。コンビニ前の通りは自動車学校の路上教習コースになっていた。武蔵境駅むさしきょうの近くにある自動車の車だった。

そこは近くに鉄道の駅がなく、市民の足はもっぱらバスと自転車に頼らなければならない辺鄙な場所へんぴで、通りにはバスがひっきりなしに通っていた。そこへのろろ運転の教習車が現れると、

たちまち通りは渋滞になる。後続車が苛々する様子がおもしろくて、よくコンビニ前のベンチに座っては往來を眺めていた。

くる日もくる日も渋滞の先頭をのろのろ走る車を眺めるうち、いつしか彼らが淡ましくなった。彼らはお金と時間を費やして、運転という目的のため必死にハンドルを握っている。なんとう揺るぎない目的だろう！そしてその努力の先には免許というごほうびが待っている。なんと明確な果実だろう！私には、明確な目的に向かって日夜邁進する彼らが輝いて見えた。

もちろん車の免許を取ったからといって人生はバラ色になるわけではない。しかし当時の自分には、朝起きて夜寝るためだけの、ほんの小さな手がかりでも必要だった。

免許取ろうかな。その時初めて、具体的に思った。

しかし「金がある時には暇がない、暇がある時には金がない」というのは世の常で、その時の私は後者だった。

その時と似ていた。あれからすでに四年がたち、体力も記憶力もみるみる衰えている。免許に挑むなら一刻も早いほうがいいだろう。

免許を取るのだ！

もう迷わなかった。

私は多分、免許に救済を求めていたのだと思う。

島へ免許を取りに行く

／もくじ

第1章

それはにわとりですか？

16

自動車学校で馬に乗る??

23

いざ、五島へ

29

15

第2章

新しい生活

38

初めて車を運転する

47

北九州のアニキ

55

運転適正検査

60

いよいよ馬に乗る

68

遠足

70

37

第3章

世界が逆転する 81

不思議な教科書 88

迷子になる 92

みきわめ 98

五島のママ 103

リハビリ 106

第4章

車脳 116

逃避行 120

森島のおっちゃん 127

バイキング 131

イメージトレーニング 137

寮長就任 144

挫折 148

天使が舞い降りた 154

第5章 159

仮免 160

路上デビュー 164

五島の後藤さん 169

それは法律違反です 174

路上のプレゼント 178

Uターン 183

第6章 189

五島は出る 190

それぞれの旅立ち 196

役に立たない地図 206

サザエさん 211

やっぱり五島は出る 215

旅の終わり 220

第7章

免許取得 230

地獄篇 234

わかばともみじ 244

東京で迷子になる 249

さらばコロナ 257

あとがき
／
それでも私は乗り続ける

第 1 章

これから始まる長いカーライフを「一生無事故」で過ごされますよう
心よりお祈りいたします—— 運転教本

それはにわとりですか？

「車の免許を取るのだ」

そうと決めたら覚悟が揺らぐのが怖くて、誰かに報告しなくなつた。一番先に報告したい人は決まっていた。ミヤさんという、一五歳年下の友達だ。知り合つた頃に年齢を尋ねたら、「五六年生まれです」と言うので、「私より一〇歳も年上なんですか？ ずいぶん若く見えますね」と言うのと、西暦ではなく昭和だつた。

彼女は私がよく行く五反田ごたんたの喫茶店で働くウエイトレスさんだ。それまでは店で顔を合わせると言言三言交わすだけだつたが、ある週末、大崎の喫茶店で仕事帰りの彼女とばったり会い、四時間ぶつ通しでおしゃべりをして親しくなつた。

彼女は足立区の出身で、お父さんが駅前で開く囲碁ショップを手伝ううちに接客業のおもしろさを知り、この道を選んだ人だ。私とはまったく正反対の活動的な人で、ダンスや沖繩の海や車の運転が大好きだつた。そもそも私が免許に思いを募らせるようになったのは、彼女の影響も大きかつたのだ。

ある時彼女と車の話をしていたら、会話の中でめんどり、めんどりと連発するので、「それはにわとりですか？」と尋ねると、「免許取りですよ。『免許取り消し』の略です」と言う。彼女は数回目の免許中に原付を運転していたところを警官に呼び止められ、一発「めんどり」になつた。

「なんで私が免停中だとわかったんですか、っておまわりさんに聞いたら、大体拳動でわかるんですって。へんな言い方ですけど、いい仕事してるな、って感心しましたよ」

彼女がにわたりの仲間入りをしてから、すでに一〇年がたっていた。

仕事か明けた彼女と、いつもの大崎の喫茶店で会った。

「とうとう免許取ることに決めたよ」

「いよいよですか！ いいなあ、私も一緒に行きたいぐらいですよ。もう一〇年も運転してないから、そろそろ忘れそうぞ」

めんどりの彼女は、教習所に再び通い、一から免許を取りなおさなければならぬのだそう。

「ミヤさんも一緒に通わない？」

「六時まで仕事だから、店を辞めない限りは無理ですよ」

「でもあれだけ教習所が近いんだから、仕事帰りに通えるんじゃない？」

「え……教習所？」

「国際自動車。ミヤさんの家の近くですよ」

その教習所は大崎にあり、私はそこへ通うつもりだった。うちから徒歩で通える距離だ。二人の姉も姉の旦那さんもそこで取っていた。彼女の目が突然宙を泳いだ。

「国際？ もうないですよ」

「嘘！ だっつてずっとあそこにあっつたじゃない。うちの姉も通ったし」

「それっていつの話ですか？」

「上の姉が大学生で、下の姉が高三の頃だから……一九八三年くらいかな」

「三〇年近くも前じゃないですか！ もう閉めて下さいぶたちますよ」

武蔵野市に住んでいた時もいままも、自動車学校はすぐ手の届くところであった。ところがいざ私が取ろうとしたら、もうないのだ。なんたる皮肉。いつも手遅れ。まるで自分の人生のよう。

「目黒の『日の丸自動車』はどうですか？」

「あそこはいやだな。都会のギャルが多くて、教官に思いきり差別されそうだし」

「確かに……。だつたらいつそのこと、合宿免許がいいですよ。私も福島で取ったんです。二週間くらいで取れるし、友達もできるし、けっこうおもしろいですよ」

合宿免許……。二〇年前ならともかく、もう四〇も半ばだよ。高校卒業したての子たちと一緒に合宿するなんて、悪い冗談にしか聞こえなかった。

私はもともと協調性に著しく欠け、クラブ活動やサークル活動もろくにすることがない。当然、合宿経験は一切なし。通学する時も、同級生がいらない遠くの車両にわざわざ乗るくらい人間関係が煩わしく、会社勤めだって、ロッカールームや女子トイレでたむろする女性たちの井戸端会議がいやで挫折したほどだ。旅行にしても一人旅が鉄則。団体行動がとにかく苦手なのだ。

しかしそれしきのこと諦めるのか？ 何かを克服したくて挑戦するのではなかったのか？
こんなところで挫折していたら、目標を達成できない。

家に帰り、とりあえずインターネットで検索してみた。

「合宿免許」

出てくるわ出てくるわ、夥おびただしい数がヒットした。これだけの教習所が日本にあるとは驚いた。山の近く。海のそば。宿泊施設の豪華さが自慢のところ。教習車がベンツやBMWというのが売りのところ。コンビニもゲームセンターもケータイショップもすべて揃った、「あなたを一時も退屈させません！」がモットーの、テーマパークのような教習所。遊園地に隣接したところ。校内のレストランの豪華さが売りのところ。若い女性をターゲットにしたリゾートタイプ、山荘風、コテージ風、バンガロー風……。途方に暮れた。

ベンツには興味ないし、リゾートは嫌いだ。若いギャルだらけのところなんて想像するだけでもうんざりだ。まったく！ 過度の選択の自由は苦手なのである。大きなスーパーに行って大量の商品群を目にするだけで吐き気がしそうなだけだから。自分には苦手なものばかりで社会は形成されているような気がした。

なんだか笑い出しなくなつた。

私の希望は免許を取ること、個室があること、それだけだ。コンビニやケータイショップなどなくてかまわないし、ゲームセンターや遊園地がなくてもまったく退屈しない。というより、あつたら逆にうるさくてかなわない。コテージやバンガローでなくてもいい。ただ静かに、淡々と、教習に取り組みたいだけなのだ。

ところがインターネットという情報の海の中では、贅沢を言わないことは逆に致命傷なのだ。痛感した。ベンツやBMWに乗りたい、コンビニがなくちゃ生きていけない、リゾートタイプがいい、とわがままを増やしていったほうが、しほりこむのは余程楽なのだ。

一体どうすればいいんだ。

埒が明かないので、まずは地理の観点から数をしぼりこんでみることにした。心が冷えているから、暖かいところがいい。北海道、東北、信越、関東を除外。ええい、いちいち面倒だ、本州全域、除外してしまえ。

九州、四国、沖縄が残った。

沖縄はリゾートタイフが売りのところが多く、若いピチピチした水着姿のギャルの写真はかりが軒並み掲載されていた。吐き気がする。沖縄も除外だ！

残るは九州と四国にしぼられた。

ラーメンの九州と、うどんの四国。私の場合、迷わずラーメンですよ。四国も除外。とうとう九州だけが残った。拍子抜けした。

なんだ、最初から九州限定で探せばよかつたんだ。九州が好きだったことを、この期に及んで思い出した。もともと野球はホークスのファン。そして二年ほど前から突然九州の歴史に興味が湧き、二〇〇九年一月には長崎、島原、天草、二月には阿蘇と高千穂を旅行していた。

九州のどこにしよう？ 私の場合、それはもう、長崎県以外に考えられない。

東と西の出会い場所、長崎。異国への窓口、長崎。古くから様々な出自の人間が行き交ってきた場所、長崎。

長崎！ 長崎！ どうしてもっと早く気づかなかつたのか。合宿免許は、好きな場所ですればいいだけの話ではないか。

私は嬉々として長崎県内の教習所のホームページを次々に閲覧し始めた。

ところが一校一校、特色や条件を調べていくうちに、思わぬ障壁が目の前に立ちはだかった。通いの場合はその限りではないが、合宿免許に限っては二五歳、あるいは三〇歳までという年齢制限を設けているところが非常に多いのだ。佐世保——私の大好きな、元ホークスで現タイガースの城島健司の故郷だ——で一つ良さそうな教習所を見つけたのだが、そこもやはり年齢制限があった。

これには腹が立つというより、呆れた。まったく意味がわからない。教習所にとって、若者ばかりを集めるメリットは一体どこにあるのか？ 喫茶店が冷房をギンギンに入れて客を速く追い出し、回転をよくする、みたいな発想？ 私はそういう店に入ると、風邪をひいてもいいから長居してやるタイプの性悪な客なのだが、教習所の場合、これはまったくのナンセンスだ。コーヒー一杯で何時間も粘れる喫茶店とはわけが違い、教習所は教習時間が延びれば延びるほど金がかかる可能性が高い。つまり反射神経がよく、記憶力も優れた若者より、習得に時間がかかる年配者のほうがたくさん金を落とすはずなのだ。一人当たりの客単価が高いのは圧倒的に年配者ではないか！

私が教習所の経営者なら、「あなたの納得がいくまで、とことん懇切丁寧に付き合います！」「いくつであっても、あなたにも必ず免許が取れます！」「じっくりやっていきましよう！」「第二の人生、車という自由を手に入れませんか？」と売り出すところなのだ。

つまりそんな潜在的優良消費者をあらかじめ切り捨てるといふことは、ただ単に年配者を相手

にするのが面倒なのだろう。

悲しくなった。年配者はそれほど扱いが面倒ですか。そんな教習所には絶対に行きたくない。だんだん不安になった。姉や友人たちからさんざん聞かされた、怖い教官の話を思い出した。

教習所には、まったく何もできない生徒を日々相手にするうち、自分を全能の神か何かと勘違いし、専制的に振る舞う教官が少なからずいるのだという。生徒の年齢や美醜や社会的地位によって待遇が変わるのも日常茶飯事。私の長姉は高圧的な教官に担当されてしまい、教習所へ通うのが苦痛になってしまったくらいだった。そして初めて路上に出た時は、明治学院大学前の坂道で前の車に追突しそうになり、「おまえ、俺を殺す気か！」と怒鳴られた。そして姉はやつこのことで免許を取ったにもかかわらず、結局一度も車を運転しないまま、今日に至っている。

どうしよう、そんな教官ばかりいる教習所に入ってしまったら。年をとると精神的なダメージはあとを引く。傷を癒すために教習所へ行き、傷を深めることにもなりかねない。

人のいい教官がいる教習所に行きたい。しかしそれをどうやって探し当てたらよいのだろうか。しばし思いをめぐらせ、至った結論は、普段の生活でしているように、宣伝文句や口コミではなく、自分の勘を信じるしかないというシンプルなことだった。

年齢制限のあるところは、思想的に言語道断。施設の豪華さばかりをアピールするところは、ハード重視でソフト、つまり人材を軽視している可能性がある。うちにはこれもある、あれもある、と声高に主張するのは、人と同じで、中身に自信がない証拠。中身に自信があれば、そんな虚飾に頼らなくてもよいはずだ。

私のイメージする心地よい教習所とは、学びたい人を選ばない寛容さを持つところ。効率や利益より、味で勝負できるころ。ファストフードに対抗するスローフードのような、いわばスロースクール。たとえばそれは、お年寄りに優しい教習所。

自分をその範疇はんしゅうに含めるのは若干抵抗を感じたけれど、思いきって検索条件を一つ加えた。

「高齢者」

ぐっと件数が減った。その劇的な減り方は、何事も若者ばかりを優遇するお子様天国・日本を象徴しているようだった。

その上位に「ごとう自動車学校」が登場した。

自動車学校で馬に乗る??

長崎県五島列島——隠れキリシタンの里。小さな島に建つ教会の数々。いつかは訪れてみたい場所の一つだった。しかし教会はいくつもの島に点在しているから、個人で行けば膨大な時間とお金がかかる。いつかお金と時間ができた時に行けたらいいな、と思っていた。

そんな五島にしばらく滞在できるなら、悪くないかもしれない。

しかも島という存在に惹かれた。東京と地続きだと、教習に嫌気がさして逃げ帰ってくる恐れ

がある。東京から遠く、荒い海に囲まれた島なら、いくらへなちよこな自分でも帰る気が失せるだろう。

そして、なんとこの自動車学校には馬場があつて、馬がいるという。

「自動車の運転は人命に関わるものです。馬とのふれあいによつて、優しさを大切にすると安全運転者になって頂きたいと願ひ、全国唯一の乗馬体験が出来る自動車学校が五島に誕生しました」
自動車学校で馬に乗る！

なんだか意味不明で、素敵ではないか。私は教習の条件や金額などそつちのけで、「ごとうのゆかいな仲間たち」の紹介ページに夢中になった。

馬のファンタジスタ、コータロー、エフィーブラック、「お米じゃないわ！」というアキコマチ。ポニーのミセスゴジョウ。

「教習生と散歩に行くことが楽しみ」な、犬のマリア。

趣味は「散歩と草の食べ歩き」という、山羊のミント。

そして「朝の目覚ましは私たちに任せて！ 遅刻はさせないわ」というおんどりの清と、めんどりの瞳。ちなみに瞳は「免取り」ではなく、本物のめんどり。

目がキラキラした。心が動く。猫を失った悲しみを癒すのに、動物がたくさんいることは何よりも得がたい環境のように思えた。動物の体温は、どんなものよりも心に効く。

それからようやく、様々な条件を確認し始めた。

「広々としたコース、目の前に広がる紺碧の海。五島ならではの大自然に囲まれた学校なら、教

習で緊張した心をほぐし、次の実車も気持ちよく教習することができます。海に見とれて、脇見運転にならないように注意が必要です！」

「いねー!」◎

追加料金を払えば個室がある。◎

ゴールデンウィークにすいている。◎

入校に年齢制限はなし。◎

若者の優遇はある。二五歳以下なら、仮免に落ちたり教習時間が延びたりしても無制限で延長できるが、それより年長者は有料になる。それはもともと覚悟の上。年齢で切られなければ、それでいい。○

高齢者講習を行っている。◎

最寄りのコンビニとショッピングセンターは車で一五分のところにある。くすくす笑う。だつて車に乗れないのだから、車で行けるわけがないでしょうよ! 私は別にコンビニ撤廃論者ではないけれど、「コンビニが近くになければ生きていけない!」という生徒より、「コンビニがなくともかまわない」という生徒が多い学校のほうが静かでもいいだろう、という気がした。◎

この学校、いかもしれない。だいぶ心はごとう自動車学校に傾いていたが、肝心の教官はどうなのだろう。そうだ、そこが大事だよな。手当たり次第にページをクリックしていき、ようやくスタッフ紹介のページにたどり着いた。

校長一名、教官一七名、乗馬指導員一名、送迎スタッフ一名の、計二〇名の顔写真と紹介が載

っていた。ほとんどの人が日に焼けている。私が特に注目したのは趣味、特技の項目だった。

校長——趣味・魚釣り。特技・我慢強い。

A 教官——趣味・イカ釣り。特技・イカのお造り。

B 教官——趣味・魚釣り、ドライブ。特技・原色系の魚釣り。

C 教官——趣味・イカ釣り。特技・野菜作り。

D 教官——趣味・釣り（アラ、石鯛、メジナ）。特技・おいしく食べること！

E 教官——趣味・魚釣り。特技・マジャン。

F 教官——趣味・エギング。特技・素潜り。……

二〇名の教職員のうち、なんと七割にあたる一四名の趣味が釣り関係だった。

見ながら、いつしかにやにやしていた。昼間は自動車学校で働き、休日は魚釣りや野菜作りにいそむ、そんな先生たちの暮らしが目に浮かぶようだった。毎朝教職員室で、昨日釣ったイカや魚の自慢話をしあっているのだろうな。

釣りの好きな先生が過半数を占める自動車学校は、風通しがいいのではないだろうか？ 何の根拠もないけれど、そんな予感がした。

もうほかの教習所を探す必要もない。ここにしよう。気持ちは固まった。その場で資料請求の申し込みをした。浅田真央が涙の銀メダルを獲った夜だった。

入校日は四月二日に決めた。私が取ろうとしているオートマテック車は、最短で一六日間
で取ることができる。東京と五島の移動は丸一日かかるので、往復で二、三日は必要になる。普
段さほど忙しい生活を送っていないとはいえず、月に何本かの仕事はしている。しかし五島にまで
仕事を持ち込む気はさらさらでない。二週間以上仕事を休むなら、世間の業務が停止するゴールデ
ンウィークを挟んだほうがいいだろう、という判断だった。

東京から学校のある五島・福江島（+くまじま）へ行くにはいくつものルートがあり、これは悩ましい問題だ
った。目的地が遠ければ遠いほど、そこへ至る選択肢は増える。例によって、選択の自由にもた
らされる苦悩だ。しかも私には、「絶対に安く行きたい」とか「最も体が楽な手段で移動したい」
とかいった、明確な優先順位がない。全然金がなければ、あるいは金はあるが全然体力がなけれ
ば選択は簡単なのだが、金もそこそこ、体力もそこそこ。まさに若者と老人の中間地点に位置す
る人間の尽きせぬ悩みである。

昔よりは体力が落ちているから、それなりに楽な方法で移動しなければならぬ（したい、で
はなく、しなければならぬ）、と思いつつも、しかしそれなりに安くしておもしろい方法で行きたい。
そのせめぎあいの連続。

移動手段は、目的地に近いところから逆算して決めていった。

まずは島へ渡る手段。空か海。福江島への飛行機は博多と長崎から出ているが、格安航空券が
売られていないため、価格は東京から二都市へ渡る早割便より高くなってしまふ。費用対効果が

悪すぎ。ありえない。それにたとえお金に余裕があつたとしても、せっかく島へ行くのに三〇分あまりで着いてしまう飛行機では味気ない。免許が目的とはいえ、できるだけ旅情を味わいながらじわじわ島へ近づきたい。これは迷わず却下した。

残つたのは海のルートだが、これには博多、長崎という二つの選択肢があつた。

博多からはフェリーが、長崎からは高速ジェットオイルとフェリーの二種類が出ている。博多発のフェリーは夜行で、所要時間は九時間半、価格は五八八〇円。長崎発のジェットオイルは、一時間二〇分ほどで六六三〇円。一方フェリーは約四時間で二七〇〇円。

こういった選択が一番難しい。迷いに迷い、決断を下すのに一週間以上悩んだ。それだけ暇があつたら仕事しろよ、と自分に何度もツツコミを入れたが、どんな時間帯にどこを経由してどの道を通るといった、多くの人にとってはどうでもいのように見える選択に異様に執着するのが自分の癖であるらしい。地図を見ながら旅路を想像する時間が、おそらく一番好きなのだ。

最終的には、最も時間がかかる博多発フェリーを選ぶことにした。決め手となつたのは、船が通る経路だ。長崎発フェリーが一直線で長崎港と福江港を結ぶのに対し、博多発フェリーは五島列島の島々の間を縫うように、いくつもの港に立ち寄りながら進んでいく。だからこそ時間がかかるわけだが、これは余計に時間をかけてでも見るべき風景だろう。大好きな長崎を経由しないのは心残りだが、帰りに經由すれば済むことだ。

ようやく博多発という結論に落ち着き、残る選択は東京と博多間の移動手段だけになった。これも調子に乗って、夜行の高速バスで行こうかとも考えたが、さすがにこの歳で二晩連続の夜行

は避けたほうがいいだろう、という理性が最後の最後に働いた。だいたい、これは自分探しの旅ではなくて、自動車の免許を取りに行く移動なのだから、あまり若者ぶるのはやめようよ。野球のピッチングに緩急つけた配球が効果的なのと同じで、旅程にも緩急が肝要だ。結局、旅の冒頭は速い飛行機、終盤は遅いフェリーという結論に落ち着いた。

つね、五島へ

入校日前日の四月二〇日夕刻、羽田から飛行機で福岡に着いた。

博多駅周辺でさくつとラーメンを食べてからフェリー乗り場へ行こうと思っていたのに、バス停がどこにあるのか全然わからず、荷物を引きずりながら一時間以上駅の周辺をうろうろしてしまった。こういう時は意地を張らずにタクシーに乗ればよいものを、負けず嫌い根性がむくむくと湧いてきて、バス停が見つからなければ見つからないほど、意地でもバスに乗りたくなくなる。一体それほど何に負けたくないかといえば、それは二〇年前の自分なのだ。「昔の自分ならそんな贅沢はしなかった」「どんなハプニングも楽しむことができた」という、過去に行った旅の幻影が常につきまとい、現在の自分の気力や体力の衰えをあざ笑う。そして粋がつて若い時のような無理をし、疲れ果てる羽目になる。まるで二〇年前の自分と二人旅をしているみたいだ。

ようやくバス停を探し当てた時には、すでに八時を回っていた。乗り込んでほっとしたのもつかの間、大きなホールの前にさしかかると、ちょうど何かの大会が終わったところらしく、グループごとに幟を立てた大群衆に出くわしてバスが立ち往生。幟に書かれた文字からすると、どうやら共産党の大きな大会があったらしい。ようやくフェリー乗り場に到着したのは八時四五分。乗船時間の九時半まで一時間を切っている。あたりは暗くひっそりと静まりかえり、ラーメン屋などどこにも見当たらなかった。空腹感がどっと押し寄せた。

空腹問題。これは私が日本国内を旅行するたびに直面する問題だ。地方では鉄道や路線バスの本数が圧倒的に少なく、しかも常に私は行き当たりばったりで行動しているので、余裕をかましてゆっくりごはんなど食べていると、もうバスがなくなっていたということになりかねない。食事は後回しにして、まずはバス停を探すのがいつでも最優先事項になる。

そしてたいいていの場合、バス停の周囲には食堂もお店の類もまったくない。食堂を探しに行けば、バスに乗り遅れるのは目に見えている。結局いつも、空腹のままバスを待つことになる。地方に行くと、連日昼も夕もパンやおにぎりということが多くなり、朝買ったおにぎりを夜ホテルで食べてお腹を壊したこともあった。

私是一九九〇年代、南中国を旅行することが多かった。日本国内で悩まされる、交通機関が少ない、食べるところがない、という二つの問題は、改革開放政策が浸透した南中国ではほとんど心配する必要がなかった。バスはほとんどが個人経営で、どこかへ行きたい人間が数人いれば、必ずそこへ向かうバスがあった。たとえばバスがなくなるとも、交渉次第でオートバイを持っている人

が乗せてくれた。

食堂については、なおさら心配したことがない。人が集まる可能性のある場所には必ず屋台や食堂があった。山道でバスが果てしない渋滞に巻き込まれた時も、そこがいつも渋滞になることを熟知した近くの集落の住民たちが、即席屋台を天秤棒にぶら下げてわらわらと集まり、腹をすかせた乗客たちに麺や粽ちまきを売ってくれた。こんなこともあった。何かを食べさせる屋台だと思つて椅子に座つたところ、それは屋台ではなく、ある家族の食卓だった。慌てて立ち上がり、恨めしそうに眺めていたら、隣れんで本当に食べさせてくれた。

人けのない場所で空腹を感じるたび、ああ、日本だなあ、と実感するのだ。

博多から福江島へ向かう太古丸たごまるの乗船は、出港二時間前の午後九時三〇分から始まつた。私が東京で予約をして買ったのはスタンダードルーム、つまり最も安い、大広間に雑魚寝ざさねをするタイプのチケットだった。二〇〇〇円の追加料金を払えば、寝台列車のような二段ベッドに移ることもできるし、もっと追加すれば個室もあることはわかつていたが、それでは周りが見えなくておもしろくない。別にケチつたわけではなかった。

乗船すると、大広間の中心部分はおそろいのオレンジ色のベストを着たお年寄りの集団に占領されていた。私は壁際の角に陣取り、荷物を足元に置いて自分のスペースを確保した。私の隣には、三十代に見える女性が陣取つた。目が合う。この機会を逃したら、あとは話す機会を失うだろうと思ひ、「こんばんは」と挨拶した。女性はにこりとほほえみ、「よろしくお願ひしますね」

と応えた。三人分おいた場所にもう一人女性がやって来たが、こちらは全身から「私に話しかけないで」というオーラを漂わせていて、挨拶をするどころの話ではなかった。荷物を置くなり横たわり、毛布で体を包み、頭からジャケツトをかぶって寝てしまった。

ほほえみを返してくれた女性は実春みはるさんといひ、福江島の一つ手前、奈留島なるとの人だった。フェリー乗り場でかろうじて手に入れたおにぎりをすすめると、「よかよ。うちもお弁当持つとるけん」と言うので、「すみません、昼から何も食べてなくて死にそうなので、じゃあ食べます」と、がつがつ食べながらおしゃべりをした。

お年寄りたちはもともと同じ共同体に属する人たちらしく、場所を確保するなり、焼酎の瓶やおつまみを並べて大宴会を始めた。「これを待つてました」とでも言いたそうに、楽しく騒いでいる。

「島の人たちやね。どこか旅行に行った帰りなんやろうね。楽しそう」と実春さんが目を細める。楽しそうなお年寄りたちとは対照的に、ばらばらと乗り込み始めた女性客たちは一人旅が多く、よほどのこの航路に乗り慣れているのか、テキパキと荷物や枕を設置すると、誰とも会話をかわさず横になって目をつぶった。誰かに顔を見られて話しかけられるのを避けているように見えた。

「ほとんど島へ帰る人たちみたいやね」

そう言う実春さんは、大阪から奈留島へ帰るところだった。息子が就職して四月から大阪で新生活を始めため、様子を見に行ったのだという。ということは私と同じくらいか、あるいは年上か！ものすごく若く見える……。本当は大阪にもう二、三泊する予定だったが、「明日から

海が荒れそうな気がした」ので、急遽新幹線で博多へ戻り、この太古丸に乗ることに決めた。

「海が荒れそうだって、大阪にいてもわかるものですか？」

「だいたい天気予報見てればわかるけん。今日はナギだからよかよ。明日はこんなもんじゃなか。太古丸は荒れるとキツか。お宅さんも今日でよかつたよ」

彼女の話を聞いていると、自分がどれだけ自然と縁遠い生活を送っているかを痛感した。私は何をおいても旅情優先で、天気予報などあまり見ないもの。

私がかれからごとう自動車学校へ通うことを話すと、「うちもあそこで取つたんよ！」と実春さんの目が輝いた。

「じゃあ私の先輩ですか」

「もうだいたい昔の話やけど。五島列島を車で走っている人は、ほとんど全員あその卒業生よ。五島にはあそこしかなかけんね」

島を走る車、走る車が自分の先輩……素敵な話だ。

一時を過ぎ、船がまだ出港していないというのに、お年寄りたちの宴会は終わり、さつさと眠りについた。周りを見回すと、ついさっきまでガラガラだった大広間は、いつの間にか満席になっていた。一時半、船がゆっくりと岸を離れると、船内は消灯になった。実春さんも休んだ。私は閉められたカーテンの中に頭をつっこみ、船窓を流れてゆく風景を眺めていた。そんなことをしている乗客は、ほかに誰もいなかった。

乗客たちが寝静まった未明、船は最初の寄港地、宇久に泊まった。オレンジ色の街灯にぼんや

りと照らされた島の波止場で、午前四時という時間に降りる客と乗る客がいて、降りた客が波止場の背後に広がる駐車場から車で出ていくのが見えた。この船に旅人気分で乗っているのは多分私くらいなもので、あとの人たちにとっては生活航路のようだった。五島を訪れる旅行者の多くは、長崎から高速ジェットフォイルに乗るのだろう。その様子を垣間見られただけでも、太古丸を選んでよかった。

船が寄港するたびに起きて風景を見ていたので、私はあまり深く眠ることができなかった。空がすっかり白んだ六時頃、実春さんが起き出し、一緒に風景を眺めた。船は五島列島の島々の間を縫い、左の島に寄ったり右の島に寄ったりして進んでいく。見えるのは崖と岩の塊ばかりで、平地や耕地の類は一切見えない。一八世紀、大村藩の農民たちが多数五島へ移住したと聞くが、それは開墾目的というより、やはり信仰のためだったのだろう。荒々しい島の風景を見ると、そんな実感が湧いた。

「船でしか行けん洞窟にマリア様がおるところもあるとよ。奈留にも江上えがみ教会いう木造のきれいな教会があるけんね、いつか奈留にも来たらよかよ。うちが車で案内するけん」

「その時は私も運転代わります。免許取れたらの話ですけど」

「取れるよ！ あそこで取れんかったいう人、一人もおらん」

いつか奈留で再会することを約束し、午前八時、実春さんは降りていった。彼女のおかげで五島列島の第一印象は心温まるものになった。寝台ではなく大広間を選んでおかげだった。

彼女と入れ替わるように、おばあさんたちがたくさん船に乗り込んできた。そして九時ちよう

どに船が福江港に到着すると、おばあさんたちは先を急ぐようにたつたつたと降りていき、船着場の正面に停められた路線バスに次々と吸い込まれていった。行き先は「五島中央病院」。私にとっては旅の船でも、おばあさんたちにとっては、福江にしかない大きな病院へ行くために、欠くことのできない移動手段なのだった。

福江島……大きい！ これまで立ち寄ってきた島々とは比べものにならないほど開けている。そして、寒！ なんて風が強いのだ！ 福江ってこんなに寒いところだったのか……。暖かいところへ行きたくてここを選んだというのに、東京よりはるかに寒い。まるでとんちんかん、夏仕様の荷造りをしてきてしまったぞ。

これから何が待ち受けているのだろう。期待と不安に胸を膨らませながら、私は「どう自動車学校」と書かれたバンに乗り込んだ。

どう自動車学校のバンは、港を出て小さな市街地を抜けると、すぐに坂道を登り始めた。私は後ろを向き、眼下に広がる福江港を名残惜しそうに見つめた。考えてみたら、今度いつ港へ来られるかわからない。次に港へ来るのは、島を出る時かもしれないのである。

太古丸の中で仕入れた各種の地図をデイバックの中から取り出し、進行方向に向かってぐるぐる回しながら、自分の位置確認に努める。福江島は上五島、下五島を含めた五島列島最大の島で、だからこそ五島藩の城も置かれていたわけだが、想像よりはるかに大きな島だ。昨晩フェリーから眺めた島々と、まるで規模が違う。まさに五島地方の行政の中心という感じ。最果ての地、五

島へ——。そんなイメージは、早くも覆された。

人間の地理感覚とはおかしなものだ。前日の朝ごはんを東京で食べ、福江島を勝手に「最果ての小さな島」とイメージしていた人間が、今日の朝ごはんもまだ食べないうちに、この島を巨大だと感じている。軸足をどこに置くかで、世界の広さは激変する。

急な坂道を下りきり、信号から右折すると一気に視界が広がり、目の前に海が広がった。ようやく島の南側に抜けたのだ。大浜地区。大浜という地名の通り、遠浅の砂浜が広がっている。そしてバンは砂浜の前で一時停止し、門の中へ入っていった。

これが「ごとう自動車学校」である。本当に、海の真ん前に建っていた。

第2章

のんびりしすぎてはいけません——
運転適正診断表(K型)

新しい生活

「目の前に広がる紺碧の海。海に見とれて、脇見運転にならないように注意が必要です！」

ホームページの文言は誇張でも何でもなかった。世間には「海は目の前です」といううたい文句で消費者をひきつけながら、実は海の真ん前でも何でもない誇大広告がよくあり、私は「海は目の前」を容易には信用しないようにしているのだが、ここはまさに海、県道、自動車学校、なのだ。すごい！ 大波が来たら教習コースが水浸しになりそうなほどだ。本当に、脇見運転をしないでほしいような最高のロケーション。

小さな学校だ、多分。他の教習所に行ったことがないから比較する対象がないけれど。校舎は小さく、敷地面積はやたら広い。入り口から中に入ると、銀行の窓口みたいな受付の奥に教官室があり、先生たちの顔が見える。アットホームな感じ。ロビーに設けられたいくつかのソファにちらほら生徒が座っている。受付で手続きを済ませると、赤いギンガムチェックの割烹着を着た用務員のおばちゃん、草野さんが部屋まで案内してくれた。

校舎の裏側には厩舎と馬場がある。海側の教習コースよりよほど広いのではないだろうか。数頭の馬たちが、馬場の柵から首を伸ばして草を食んでいるのが見えた。

「本当に馬がいますね！」

「ここにおる間、たくさん乗ったらよかよ」

私が宿泊する「女子新寮」は教習車駐車場の真上にあつた。一階が駐車場、二階が男子新寮、三階には別階段で女子新寮があり、二階と三階を自由に行き来することはできない構造だ。別にそこまで男女を分けなくてもいいんじゃないのかな、と私などは思うが、自動車学校というのは、血気盛んな若い男女たち、つまり動物的な観点から言えば絶好の繁殖期を迎えた人間の男女が多く集う場所であるから、このくらいの制限は必要なのだろう。

部屋は天井がものすごく高く、ホテルのトリブルくらいの広さがあつた。しかもベランダの向こうには教習コースと海！涙が出るほどの環境の良さだ。

「こんなに広くてきれいな部屋とは思いませんでした」

「そげん広か？」

「広いですよ！めちゃくちや贅沢です」

「ここは土地、いっばいあるとやけんね」

寮内の施設を見回ったあと玄関に戻る。玄関には七センチくらいありそうなハイヒールが二足とハローキティのサンダルがあちらこちらの方向を向いて脱ぎ捨ててあつた。サンダルはバツタ品なのか、HelloのスペルがHellになっている。地獄キティ！その様子がおもしろくてサンダルを凝視していると、草野さんは心なしか申し訳なきそうに言った。

「そうそう、星野さんの他にあと一部屋入つとる。福岡のギャルちゃん二人や」
靴を見ればだいたいのことは想像できた。

「そのうち会うと思うばつてん、びつくりせんでね。よか子たちやけん」

草野さんと別れて階段の踊り場から馬場を眺めていたら、校舎の方角からミニスカート姿に金髪の長髪、茶髪のおかっぱ頭の女の子たちが近づいてくるのが見えた。あれが「福岡のギャルちゃん」たちか。新参者としては、早いところ挨拶をしておいたほうがいいだろう。あとでいきなり声をかけたら「なぜ自分たちのことを知っているのか」と訝しく思うだろうし。二人の頭が階段の曲がり角から現れたところで「こんにちば！」と声をかけると、「うわあ、びっくりした」と二人は階段から転げ落ちそうになった。

今日入校したてで右も左もわからないのでよろしく、と簡単に挨拶。

「どうも。うちらうるさいけん、うるさい時は『うるさか』言うてくださいいね」とおかっぱ頭の子が言った。草野さんの言っていた通り、いい子たちだった。

それにしても、この島の寒さは尋常ではない。原因は、常に吹き荒れている強い風だ。数字上の気温より、おそらく体感温度はさらに二、三度低いだろう。

太古丸で仕入れた旅行小冊子によると、その昔、遣唐使船が唐の国へ渡る際、この島から出港したのだという。遣唐使といえ、荒れ狂う東シナ海を越えることができず、夥しい死者を出したことで知られている。大陸と日本の間の風がこれほど強いということをいきなり福江島で体感し、遣唐使が身近な存在に感じられた。

しかし遣唐使に共感を寄せている場合ではない。この島にいる間、風邪をひかないようにしなければ。長袖Tシャツの上にポロシャツを重ね、さらにVネックのセーターを着、それでもまだ全然寒いので、本意ではなかったが、寝巻きとして持ってきたヨットパーカーをその上に着込ん

だ。まさか私が寝巻きで入校式に出席しているとは、誰も思わないだろう。

その日入校したのは私を含めて六人だった。若い男女が前の列に座り、作業着風の格好をした、三十代くらいの男性二人と、まさに農作業の途中で抜け出してきた感じの日に焼けたおっちゃん、三人が最後部に座っていた。なんとなく全員と目で挨拶をし、私は中間地点に座った。

校長先生は数年前まで教官をしていたという大柄な人だ。二十代の頃、東京は三鷹市の牟礼に住み、信用組合の営業でバイクであちこち回ったという。校長は力説した。ここは教習所ではなく、長崎県公安委員会に指定された自動車学校である、と。私はこの二つの違いがまったくわからず、現に混在して使ってきたが、先生の話を自分なりに解釈したところ、教習所はただ運転技術や学科だけを教える場所で、自動車学校は運転に必要な精神性までも教えるところであるらしい。だから厳しく指導しますよ、というわけだ。

この自動車学校は「互譲」という考えを精神的支柱にしている。要は、すべてのドライバーが命を大切に思い、譲り合いの心を持って交通事故はなくなり、誰にとつても暮らしやすい社会になる、という考えだ。その教えを徹底させるため、朝の始業、授業の開始、教習車に乗り込む際には必ず「互譲三訓」を教官と一緒に唱和するのだという。そして学校であるから、校内では飲酒禁止、異性の部屋への立ち入り禁止、門限は一〇時、時間厳守。

何十年かぶりに学校へ来たなあ、という実感が湧いた。自分も大人ですから、みだりに捻破りをするのはしないが、いかんせん規則とは無縁の自由な生活をしているから、規則の存在には

プレッシャーを感じる。規則ずくめの中、無事二週間あまりを過ごせるだろうか。友達とか、できるのだろうか。

「先生、馬はいつ乗っていいんでしようか？」

手を挙げて質問すると、校長の顔がくしゃっと崩れた。

「馬はいくら乗ってもよかですよ。五島におる間、たくさん乗ってください。私はこの学校の中で一番暇ですから、何か質問があつたら遠慮なく聞いてくださいよ。いつも一番奥に座っとります」

建前とは裏腹に、気さくな人であるらしい。

休憩時間、おっちゃんに声をかけた。森島さんといい、島で農業を営む人だった。よく日に焼け、「人がいいです」と顔に書いてあるような人だ。農作業の合間を縫って「けん引」免許を取りに来たのだという。

「『けん引』って何ですか？」

「干し草を載せたトレーラーをトラックで引つ張るとですよ。それが『けん引』。トラックの免許は持つとつけど、引つ張るためにはけん引免許が要るとよ」

「じゃあいままでは引つ張れなかつたわけですか」

「いや、引つ張つとつた」

……???

「そいじゃけん、はよ取りたかよ。無免許になつてしまふけんね」

無免許になってしまふ、ではなく、文法的には「すでに無免許」が正解ですね。

つい先ほど校長先生から聞いた学校の理念と、島のゆるい現実のギャップがおもしろかった。

事務員の女性が学科スケジュール表に赤い丸を付け、私が受けるべき授業の最短時間割を組立ててくれた。四月二一日入、四月二八日修、五月六日卒、と枠外に書いてある。「修」は修了検定、つまり仮免許試験のこと。これをパスすれば教習コースから路上へ出て練習することができ、「卒」は卒業検定。路上で運転技術の検定を受けること。卒業検定に通って学校を卒業したら、各自が地元 of 交通試験場（私の場合は東京都品川区の鮫洲^{さまづ}運転免許試験場）で筆記試験を受け、それに通ったら晴れて本免許の交付、という段取りになる。

えー、五島で免許は取れないんだ。そんなことも知らなかった。免許は日本全国、自分の好きな土地で発行してもらえるものだと思っていた。五島発行の免許が欲しかったのに。がっかりだ。ちなみに、五島の人も五島で免許を取ることはできない。本免許の筆記試験は、長崎本土は大村市の長崎県運転免許試験場で受けなければならないのだ。つまり五島発行の免許というものは、この世に存在しないことになる。

時間割には一から二四までの数字が乱数表のようにちりばめられ、数字が赤丸や点線の赤丸でランダムに囲まれていた。私には何が何だかさっぱり意味がわからないが、とにかくこの赤丸の授業に出、毎日二時間教習車に乗るのだという。学科の授業が四時間に車が二時間の六時間！しかも空き時間には「効果測定」という模擬試験を自主的に受け、九〇点以上を二回、あるいは八五点以上を五回取らないと仮免許試験を受ける資格が得られない。朝から晩まで、なんという忙

しさなのか。運動神経が鈍いのはもとより、頭も二十代の頃と比べて相当回転が悪くなっており、昔より覚えるのに時間がかかるのは目に見えている。部屋に戻ってから、の自習にもそれ相応の時間がかかるはずだ。

「こんなの無理です」

開口一番私はそう言った。

「無理じゃないですよ。みなさんやってるんですから」

ペテラン事務員の針崎さんにはこやかにそう言った。

いやいや、みなさんには無理ではないかもしれないが、私は一日じゅうフル回転で活動する生活など長らくしたことがない。しかも自転車のハンドルさばきでさえ大きな疑問符がつく人間が、理屈上は二週間あまりで車の操作を覚え、交通ルールを習得し、路上に出るといふのだ。あまりに無謀ではないか。

「それに一日に二時間乗れるというのは、合宿生に優先的に保証された特権なんですよ。通いの人はそれほど集中して乗れないんですから、がんばってください」

「馬はいつ乗れるんでしょうか？」

「馬、ですか？」

「この時間割を見ると、馬に乗る暇がなさそうなんですけど」

「そうですね……星野さんは一日じゅうびつしり予定が入ってますから、あまり時間がないかもしれないですね」

自分の見通しがいかに甘かったかを痛感した。合宿免許とは、最短で免許を取りたい人が自動車漬けの日々を送るために設けられたシステムなのだ。もちろん自分もそのつもりだった。しかし島へ来た途端、目の前に広がる海や馬に心を奪われ、この環境を満喫したい心がむくむくと湧き上がってきた。まだ授業にも運転にも出ていないうちから、この環境を無視して車に没頭するのがもつたいなくなってしまったのだ。

もしかしたら私は、車や勉強に没頭する気しか起こらないような、環境の悪い場所へ行くべきだったのかもしれない。ここは、環境が良すぎる！

午後は一時間学科の授業を受けたあと、ドライビング・シミュレーターというゲーム機のような機械でハンドル操作の練習をした。

機械から流れてくる女性の音声ガイドダンスに従って操作するのだが、一緒に入学した島の女の子、二十歳のサヤちゃんが隣でいとも簡単そうに操作する横で、私はまごまごあたふた、そのたびに「先生、わかりません」とストップをかけるものだから、一向に進まない。

私はインベーダーゲームやテレビゲームといったゲーム機が流行り始めた頃に中学生だった世代で、その時代にゲーム機に親しんだ同世代の人たちはいまでも難なくゲーム機の進化に対応できるのだろうが、私は親しまなかつた。しかも子どもや甥姪などがいれば新しい世界に接する機会があつたかもしれないが、それもなく、家族の中では永遠に最年少という、どっぶり昭和の空気を保持した世界で生きてきた。

別にゲーム機など操作できなくとも生きていくのに不都合はないが、何が不便かというところ「仮想」に弱いことである。「これを本物の車と思いなさい」とか「スクリーンに流れる映像を現実世界と思いなさい」「この人間を自分の身代わりと思いなさい」とか、そういう指令にめっぽう弱い。それができる人にはどうやら「現実」と「仮想」のスイッチがあるらしく、それを自在に切り替えることで現実世界と仮想世界を行ったり来たりするらしいのだが、そもそも私には「仮想」スイッチがない。相手にしているのは常に現実世界で、自分は一人しかない。切り替えることなど、はなからできない。

シートベルトを締めてミラーを調節するところまではよかったが、エンジンをかけてアクセルを踏んだ途端に画面の映像が動き、いきなり仮想世界に突入する。ハンドルを右に、左に回すたびに風景が走馬灯のように変わっていく。無理無理、気持ち悪い。操作の基本を覚えるどころの話ではなく、仮想現実の壁が大きく目の前に立ちはだかり、吐きそうになる。終了のチャイムが鳴ると即座にシートベルトを外し、台から下りて大きく深呼吸をした。

「星野さん、大丈夫と？ 顔が青かよ」

担当の山田先生が心配して言う。

「ちよっと気分が悪くなりました。こういうバーチャルなものが苦手です」

「大丈夫、大丈夫。車は思いっきり現実世界じゃけんね」

初めて車を運転する

ゲーム機に酔って気持ちが悪いのには、夕食を食べなければならなかった。

合宿生は三度の食事を食堂でとるが、食事のできる時間は八時半〜一〇時、一一時半〜一三時半、一七時〜一九時と決められている。ところが合宿生はほとんど夕方にも一、二時間の授業が残っているため、夕食を食べられる時間は実質、夕方の休み時間である一七時からの三〇分間しかない。一七時といったら普段の私にとっては「そろそろドツールへ仕事に行こうかな」というお茶の時間。朝食と昼食の間は短すぎるし、夕食と朝食の間が長すぎる。夜中に部屋でお腹がすくことになりそうだ。またも立ちはだかる空腹問題。

三〇分で夕飯をかきこみ、次の技能実習の時間。担当は教官の中で最年少の小林先生だ。挨拶をしてあとについて行くと、先生は教室ではなく車庫のほうへ向かい、車の横に立って深々とお辞儀をした。

「え……いきなり車に乗るんですか？」

「乗りますよ」

先生はそう言って助手席に座った。

「先生は運転席じゃ？」

「僕は助手席です」

「私が運転するんですか？」

「僕が運転してどげんするんです？」

「私、運転できませんよ」

「それは知つとります」

「運転できないのに運転していいんですか？」

「運転しなきゃ覚えられんでしょ」

「波々運転席に座り、一緒に「互譲三訓」を唱和する。」

「互譲運転とは、ふれあいの心、人への思いやり、人へのやさしさを大事にする運転のことです。互譲運転とは、たった一度の人生のかけがえのない命、共に生きる命への共感、そんな心を大事にする運転のことです。」

互譲運転とはつまり、生命への畏敬、他者への真恕しんじょ、それを大事にする運転のことです。ずいぶん難しい語彙ごいを使った訓示だ。真恕しんじょって何だ？

「星野さん、車の運転は初めてですか？」

先生にいきなり真顔で尋ねられた。

「もちろん初めてです……っていうか、そうおっしゃるといふことは、逆に初めてじゃない人がいるということですか？」

「けっこうおりますよ。うちの学校来始めたら絶対にやめてね、って言っとるけど」

「もう少しゲーム機みたいなので慣れたほうがいいんじゃないでしょうか」

「車に乗って慣れるのが一番早かです。大丈夫、危なかつた時は僕がブレーキ踏むけんね」

「でもハンドルどっちに回したらいいかもわからないですよ」

「星野さん、自転車は乗れると？」

「はい。自転車の免許は持ってます」

先生の目が点になった。

「東京では自転車乗るにも免許が必要とですか？」

「いえ、要りません。うちの小学校は要りましたけど。この話を始めると長くなります」

「じゃあよかです。とにかく要はですね、自転車と同じです。右行きたか時はハンドルを右に切る。左行きたか時は左に切る。はよ練習しましょう。オートマ車はブレーキから足ば離れたら進みます。一時限目で習いましたね。何と言いましたっけ？」

「クリープ現象、でしたっけ」

「そう。だからいつでも踏み込めるよう、ブレーキから足ばけっして外さんこと。まずそれば頭に入れとってください」

「右足は忙しくて、左足は暇ですね」

「そうです。左足は絶対使わんこと。ではギアをDに入れて、ハンドブレーキ解除して」

いくら下げようとしてもハンドブレーキが下がらない。

「先生！ ハンドブレーキが下りません。この車、おかしいんじゃない？」

「解除する時はボタンを押しながらね」

ブレーキから足を外そうとしたら、先生から制止された。

「はい、まだ勝手に発進せんよ。それにいちいち僕のほう向かない。前方、後方、右、左、きちんと見て。後方は左右両方ね。声に出して確認して」

「前方よし、右後方よし、左後方よし、右よし、左よし」

「方向指示器は左に出してください」

「方向指示器ってどれでしたっけ？」

「さっき習ったはずですよ。よく思い出して」

あれこれいじると、いきなりウインドーウォッシャーの液が勢いよく噴き出した。

「液が出したら、ワイパーで拭かんばね」

ワイパーを動かそうとしても、液が出るばかりでちっともワイパーが動かない。ぎゅうぎゅうレバーを押し続ける。

「先生、レバーが動きません！ この車、壊れてるんじゃない？」

「ワイパーはレバーをカチッと回すと」

この時点ですでに額には汗がびっしょり。やっこのことでワイパーが動く。

「はい、窓拭きはもうよかです」

「では発進します」

「方向指示器は？」

レバーを回すと、またワイパーが盛んに動き出す。

「星野さんは窓拭くのがよっぽど好きとね？」

「レバーがいつぱいあって覚えきれないんです。しかも押ししたり引いたり回したり、まったくわけがわかりません」

「たつた二本ですよ、覚えんと。こう考えたらよかです。曲がり角を曲がる回数と、窓を拭く回数、どちらが多かですか？」

「曲がり角？」

「そう。だからウインカーは出しやすかのように右のレバー。ワイパーは左のレバー」

なるほど、理にかなっている。得意げにウインカーのレバーを下げる。

「右に出しとりますよ。左は上です」

「先生、なぜ右が下で、左が上なんですか？　なんとなく、右が上で左が下って感じがするんですけど」

「それにも理由があるとですよ」

「だいたい、このレバーは車の真ん中につけてほしいですね。そうしたら右と左でわかりやすいのに」

「よかところに気づきました。もしハンドルの前にこのレバーがついたら、邪魔じゃなかとですか？」

先生がペンをハンドルの前に立てて見せた。

「すごい邪魔です」

「このペンを右に傾けたまま、ハンドルの右に移動させると……？」

「あ！ 右が下です！」

「ペンを左に傾けて右に移動させると？」

「左が上！ すごくいい！」

「これで覚えましたか？ 車というのはなんとなく設計されてはおらんです。考えに考え抜いて、使いやすかように工夫されとりますよ」

なるほどねえ。感服した。左にウィンカーを出す。

「ではようやく発進します」

「もう前も後ろも右も左もよくなくなつとりますよ。もう一回確認せんと」

「前方よし、右後方よし、左後方よし、右よし、左よし。それでは発進します」

フットブレーキからおそるおそる足を外すと、本当に車が動き出した。これにはたまげた。オートマティック車とは勝手に進もうとする機械なのだ！ 通常機械とは、指令を出して初めて動くものではないか。人間が止めるまでシャッターを切り続けるカメラとか、漕がなくても走り続ける自転車とか、そんなものは見たことがない。ところがこの車は、勝手に進もうとし、私が出すのは停める指令なのだ。通常とはあべこべの世界。運転するというより、制御するイメージだ。

「はい、右カーブだから右に切って」

おそるおそる右にハンドルを回す。

「本当に右に行きますね！」

「自転車じゃなかとですから、体ごと右に傾けんでよかですよ。はい、ハンドル戻す」

「戻すって？」

「左に戻して。また体ごと左に傾いとりますよ。ハンドルはぎゅうぎゅう押さんと。星野さんは力で車を動かそうとしとるでしょう。力づくでは車は曲がらんと」

左に戻しすぎ、また右に回すと右に戻しすぎ、酔っ払い運転のように蛇行し、しかもアクセルをまったく踏んでいないから停まりそうになった。

「アクセル踏んでみましょう。二〇キロまで出してみてください」

「二〇キロってどうやって確認するんですか？」

「前向いて運転しながらアクセル踏んで、メーターば見て下さい」

三つのことを同時に行えというのか？ 一つで精一杯なのに。

「メーター見たら、前が見えませんか」

「それを両方見るとです。慣れたらできると」

アクセルを踏み込むほどにぐんぐん速度が上がっていき、怖くてメーターなど見られない。突然恐怖にかられてブレーキを踏む。

「ずいぶん速度出ましたね！」

「それでも二〇はいっとらんですよ」

「五〇くらいは出たかと思いました」

また右カーブでハンドルを右に回しすぎ、左に戻しすぎる。

「ちょっと手は離してみてください」

「ハンドルから手離すんですか！　だめですよ。危ないです」

「大丈夫。見とってください。ほら、ハンドルって手を離すと、勝手に自分で戻るとですよ」

先生の言う通り、ハンドルが勝手に左に戻った。なんじゃこりゃ！　ハンドルには意志があるのか？

「ですから力こめて戻さんでよか。軽く握ればよかとです」

「なんでハンドルは勝手に戻るんですか？」

「そういう風に設計されとつとです」

「どこまで戻るんですか？」

「元の場所」

車は常にいまいる場所から去ろうとし、ハンドルは元いた場所へ戻ろうとする。車そのものが矛盾を抱えた生き物のようだ。人間みたいではないか。私の理解の範疇をまったく超えている。

あつという間に教習時間の五〇分が終わり、私たちは車庫に戻った。びっしり教習車が並んだ中にぼっかり一台分のスペースが空いている。

「あそこに入れますよう」

「無理！」

「もちろん入れろとは言うてません。僕が入れますから大丈夫」

そう言う小林先生は助手席から手を伸ばし、ちよちよつ、ちよちよつとハンドルを操作する

と、見事に空きスペースに車体を滑りこませた。

「すごい！」

「すごくなか。慣れればできるようになります。どうですか、初めて車を運転した感想は？」

「怖い。なかなかうまくいかない。でもおもしろい！」

私の子供じみた感想に先生はくすくすと笑った。

「車ばかり好きになれそうですか？」

「私は車が好きかもしれません」

「車ばかり好きになるのが、上達への一番近道と。どんどん好きになってください」

部屋に帰ると、いままままでまったく使ったことのない脳の一部分を使ったらしく、後頭部の右下部分が熱くほてっていた。車の運転とはこれほど脳を使うものなのかと驚いた。もし運転しないまま人生を送っていたら、この脳は使わないままだったのだろうか。

その晩は泥のように眠った。

北九州のアニキ

翌朝、緊張した面持ちで食堂へ向かった。小学一年生のような気分だった。

すでに食堂で二回食事をしたが、生徒たちはみなぼつんぼつんとバラバラに座り、ほとんど会話らしい会話をしていなかった。耐えられないほどの静寂というわけではないが、これが毎食、半月続いたら、さすがにキツイ。

友達を作りたくてここへ来たわけではない。しかし毎日顔を合わせるのなら、簡単な会話ができるくらいの関係性は築きたい。最初の入り方を間違えたら、その後の関係は難しくなるだろう。まずは最初の一步が肝心だ。しかも私は、東京で人間関係の構築に失敗したばかりだ。ゼロからここで、人間関係を作ることではできるのだろうか。一抹どころか、おおいに不安がある。

深呼吸してドアを開け、「おはようございます」と元氣よく食堂に入った。腰かけていた何人かの男女がこちらを向くが、特に反応はなく、また食事に戻ってしまった。「あいよ」と返事をしてくれたのは、食堂のお兄さんだけだった。

いきなり撃沈か？ いまどきの若い人というのは、知らない人と挨拶することにもすごく高いハードルがあるのかもしれない。これは前途多難になりそうだ。

「おはようございます」

とびきり威勢のいいジャージ姿のお兄さんが慌てて入ってきた。三十代半ばくらいか。なんとなく、引退したばかりのプロ野球選手のような印象がある。これはチャンス、と思い、「おはようございます」と返した。

「あ、新しく入った人？」

「はい、昨日から女子新寮に入りました。よろしくお願いします」

「俺、下の男子新寮です。よろしく。女子新寮には、うるさいのが二匹おるでしょう。悪い奴らじゃないき、許してやってください」

彼も「福岡のギャルちゃんたち」のことを「悪い子たちじゃない」と言う。きっと、本当にいい子たちなのだろう。

「どっから来たっち？」

「東京です」

「東京！ そらまあ、遠くからはるばると」

「どちらからですか？」

「俺は北九州」

「北九州といえは……」

私は言葉を言いかけて呑み込んだ。初対面の相手に言ったら、ものすごく失礼なことを言おうとしていた。

「日本一、ヤクザが多い街やけん」

私は彼を「北九州のアニキ」と心の中で呼ぶことに決めた。別に風貌がヤクザっぽいとか、そういう意味ではない。生まれつき求心力を持つ先輩肌の人というのがいる。アニキは、まさにそんなタイプだった。

実際アニキはたいしたものだった。私と向き合って話しながらも、周囲の合宿生たちに「おまえ、そろそろ仮免いけそう？」とか、「部屋帰ってちゃんと勉強しろよ」とか、いちいち声をか

けている。誰か孤立する人が出来ないよう、全体に目を配っているのだ。そしてそのつど、「こいつは上五島です」「こいつは福岡」「この子は長崎」と、さりげなく私に紹介し、私がこの小さなコミュニティに早く溶け込めるよう、気を遣っている。

こんな素敵な大人を見るのは実に久しぶりだ。多分、私より一周りくらい若いと思うけれど、アニキについていこう。そう思わせる何かを、アニキは持っていた。こんな大人が増えたら、日本はもつと住みやすくなるのだろう。

福岡からバイクの免許を取りに来た青年がいた。髪は金髪でヤンキーぶっているが、すきんだ顔はしていない。彼もまたハローキティのバッタ品、「地獄キティ」のサンダルを履いていた。福岡では「地獄キティ」が流行っているのだろうか。彼は「自分、頭悪いんで、車の勉強は無理なんで」、バイクの免許を取りに来た。「自分、頭悪いんで」が口癖なので、私は勝手に「自分君」とあだ名を付けた。

「バイクの免許が取れたら、あとあと車も楽に取れるじゃないっすか」

「おまえ、車の免許やて一から学科勉強しなおよすやろ。バイク先取ったって、車が簡単に取れるってわけじゃないちゃ」

アニキがすかさずつつこむ。

「そうなんっすか？」

「当たり前」

「自分、やっぱり頭悪いっすかね」

「マジ頭悪か」

なぜそれほど免許に詳しいのか、アニキに尋ねた。

「免取りやけん、一から取りなおしたい」

初めて目にする、男のめんどりだ！ 世の中には、人間のめんどりがけっこういるのだね。

長崎市内から来た二十歳の女の子は卒業検定を間近に控えていたが、しきりに「あー、帰りたいな」と連発していた。

「ずっとここにいたかですよ。帰ったら現実が始まる。仕事探して働かなきゃならんけん」

「自分も帰りたくな。帰ったら待つとるのは現実だけじゃ」と上五島の青年。

「帰ったあとの話ばすんな。みんな暗くなるったい」とアニキの指導が入る。

その気持ちは私にもわかった。ここにいる間は誰もが所属する社会から切り離され、現実の憂さを忘れ、免許取得という揺るぎない目的に向かうことができる。ここでは誰かが誰かを蹴落とす必要もなければ、誰かを裏切って得をすることもない。現実世界からほんの少し宙に浮いた、一種のユートピアなのだ。しかも一緒にいられる時間は思いのほか短いから、自然と助けあい、気にかけてあう。すぐに別れていくからこそ成り立つ優しい関係が、ここにはあった。

北九州のアニキのおかげで、私はなんとか食堂デビューを果たしたのだった。

せっかくアニキについていこうと思っていたのに、彼は翌日、卒業検定に受かってしまった。

「こいつら、放っとくとすぐに羽目外して勉強しなくなるんで、監督お願いしますよ」

別れ際、アニキに若い子たちの世話を頼まれてしまった。

運転適正検査

朝の始業時、生徒、教官、事務員全員はロビーに集まり、立ち上がって「互譲三訓」を唱和する決まりになっている。それが終わると校長先生はドアに立ち、通りがかかる一人一人に深々とお辞儀をして挨拶をする。とにかく礼儀を重んじる学校であることは確かで、大人になってからの挨拶第一主義は面倒臭いなあ、と正直なところ思っていた。

しかしじきに、挨拶というのは捨てたものじゃない、と思い始めた。挨拶をすれば、会話のきっかけができる。日本じゅうで挨拶推進運動を繰り広げたいのではないかと思う。

車を運転するのは、目新しいことばかりで何もかもが楽しかった。なにせ、昨日までできなかったことが、今日ではできるようになるのだから。とはいっても、昨日はまごついた方向指示器を今日は一発で右に出すことができた！ 右カーブをうまく曲がることができた！ ブレーキを滑らかにかけることができた！……といったレベルの話なのだが。そして一つのことがかうまくできると、「うまかですよ。その調子、その調子」と先生が誉めてくれる。私はもつと人から誉めてもらいたくて、部屋に帰ると母や姉に電話をし、今日できるようになったことを報告した。お子様か！ 家族としては、「いい年して、いちいちそのくらいのこと電話してくるな」と、さぞうざったかっただろう。

四〇年以上生きている人間にとって、昨日できなかったことが今日できるようになる、という

のは、ほとんどありえないことだ。

それどころか、昨日までできていたことが今日できなくなる、という逆転現象が日常茶飯事。人の年齢はその人自身が決めればいい、と普段は強がっているけれど、生物的にはピークが過ぎているのはまぎれもない事実で、あとはどれだけ気合いや経験で老化を食い止めるかが日々のテーマになっている。

人間、何かができれば嬉しいし、できなければ悲しい。できないことばかりを考えていたら前には進めない。だからできないことは、「自分には向かない」と言い訳をして存在を無視する。そうやってこれまで生きてきた。それは年齢を重ねるにつれ習得した、生きるためのノウハウのようなものだった。

しかしそれはいつしか自分にびったり張りついた皮膚のようになり、そこへ開き直りが加わり、ほんの小さな努力さえ怠るようになっていた。

どうせ何もできない。がんばっても誰も誉めてはくれない。だからがんばらない。新しいことに挑戦もしない。いつの間にか自分の人生は「……ない」という否定形に支配され、ナイナイづくしのナイナイ星人になっていた。

何かができるって、こんなに楽しいんだ。そして、人から誉められるとはこれほど嬉しいことだったのだ。何十年も忘れていた感覚だった。私は車という未知の世界に自分を放り込んだ。いまはちょうど、はいはいから立ち上がろうとしている赤ん坊なのだ。

もしも二十歳そこそこで免許を取りに来ていたら、これほどの喜びは得られなかっただろう。

まだ自分には輝ける未来が待っていると勘違いしていたし、できないことのあまりの多さにうちひしがれていなかったから。赤ちゃん感覚を味わえただけでも、もうけものだったのかもしれない。

自動車学校では生徒一人一人に担当の先生が付き、技能実習は担当の先生に教わることが多い。この担任制は、生徒にとつては吉と出るか凶と出るかわからない、リスクの高い制度でもある。つまり教官と相性が合えば教習は楽しくなるが、相性が合わなければ地獄と化す可能性があるのだ。四半世紀前に東京で教習所に通った私の長姉はまさに後者のケースで、気が短い教官が担任になってしまい、何をやっても叱られるばかりで教習所へ行くのが怖くなってしまった。すると、いやな記憶が車に結びつけられて車そのものを嫌うようになり、結局免許取得後、一度も路上に出ないゴールド免許保持者になってしまった。それは双方にとって、もったいないことだと思う。私の担任は、副校長を務めるこの道三五年という大ベテランの古田先生だ。副校長の業務で出張授業が時々あり、初めて顔を合わせたのは教習開始三日目のことだった。古田先生が出張の際には、他の先生から教習を受ける。だから私は、他の生徒よりいろんな先生と言葉を交わす機会が多く、結果的にはおもしろかった。

小柄でとてもよく日に焼けた古田先生は、曲がったことが嫌いな人とお見受けした。朝の教習開始時に戸口に立った校長先生と挨拶をする際、きちんと立ち止まって両足の向きを校長のほうに揃え、腰を三〇度傾けたお辞儀をしていたからだ。

何事にもルーズでだらしない性質の自分が、規律正しい先生と合うだろうか、と最初は少し心配だったのだが、それも杞憂^{きうう}だった。先生は確かに理論派で指導は厳しいが、五島弁で話してくれるので、同じことを標準語で言われるより、伝わり方が三割ほどマイルドになるのだ。

先生から「運転適性検査」の結果が伝えられた。これは入学当日受けさせられた全国共通の、知能テストと心理テストを合わせたようなもの。この検査で「運転適性に支障あり」という結果が出た場合は、教習を続けることはできず、一度帰って地元の運転免許試験場に行き、再検査を受けなければならぬ。その代わり払い込んだ代金は返還される仕組みだ。五島までやって来て帰されたらどうしよう、と内心はけっこう心配だった。

「星野さんは運転することに支障はないみたいやね」

まずはとりあえず胸を撫でおろす。よく見てみると、「適性あり」より一段下がった「支障なし」だった。つまり最大限婉曲表現を使っているけれど、要は適性があるとは言いきれないが、教習を受けてもかまわない、ということらしい。

先生が詳しい分析を見ながら、「ふんふん、なるほど」とつぶやく。手のひらを見せ、手相見から将来を宣告されるのを待つ人のような心境だ。

「他にはどんなことが書いてあるんですか？」

「星野さんは気分の浮き沈みが激しかと？」

痛！

「その通りです」

「自覚はあるとやね」

「めちゃくちゃあります。小さい頃から、さんざん親にも注意されてます」

「そうね。機嫌悪か時は運転せんほうがよかね」

「じゃあ機嫌のいい時に運転したほうがよさそうですね」

「機嫌よか時は、調子に乗りすぎる傾向があるね」

痛！ 痛！

「機嫌がおおると途端にはしゃいで、『調子に乗るな』とよく叱られました」

「親御さんはやつぱりよう見とるね。あまり機嫌よか時も運転したらいかん」

「でも先生、自分で言うのもなんですが、私は機嫌いい時と機嫌悪い時と、どっちかしかないんです。そのどちらも運転しちゃいけないとなると、運転する時間がありません」

「それはいかん。機嫌よかも悪かもない、静かな気持ちで運転せんば」

うわ……人生やりなおしという感じである。

「ほう……反射神経はかなりよか」

「えっ？ そんなこと、生まれて初めて言われました」

「計算の速さと状況判断の速さが突出しとる」

てへ、とほんの少し得意な気分になる。

「しかしこれは一概によかとは言えん」

痛！

「これが速か人は自分の判断を過信しすぎて、粗雑になる傾向があると」

「過信」と「粗雑」には十分心当たりがある。これまで戯れに心理テストや心理分析などをしたことはあるけれど、どれも今ひとつピントがずれ、聞く耳を持つ気になれなかった。ところがこの分析結果は当たりまくりである。

「まあ、これをよく読んで、心に留めるごとね。車を安全に運転するためには、まず自分ば知つとらんといかん」

運転適性診断票をあらためて熟読した。状況判断や動作の正確さ、衝動抑止性といった行動面ではすべて問題なしだったのだが、問題は「精神安定度」だった。七項目のうち、気分の移りやすさ、攻撃性（自己主張の強さ）、協調性の欠如、情緒安定性の四項目が要注意に区分されていた。

「相手の立場に立って運転してください。交通場面も人と人とのつき合いの場面です。お互いにうまくやってゆかなければ、ぶつかり合うばかりです」

「緊張のしすぎは禁物です。かといって、のんびりしすぎてはいけません」

「自分勝手、ひとりよがりは許されないのです」

わかっている。わかっちゃいるんだが……。

これらについては一応自覚しているつもりだ。改善する気があるかどうかは別問題として。

やはり一番意外だったのは、先生にも指摘された「動作の速さ」だった。唯一結果が突出した項目なのだが、悲しいことに、この適性票ではこれが速いほうが逆に要注意なのだ。

「自分から危険にとび込むことは絶対にやめてください。いくら運動神経が発達しているからといって、冒険は絶対にいけません。スピードはやや殺して、抑えぎみな運転をするよう心掛けて下さい」

なんだこれは……この点だけまったく自覚症状がない。自ら危険に飛び込むようなことなどしたことがないし、「絶対にいけません」と念を押されるような冒険をしたことも、しようと思つたことすらない。教習コースで二〇キロを出すのもびくびくしているような臆病者なのだから。

四十余年の人生を振り返れば、多少の無茶をしてきたことは認める。行き当たりばつたりの旅行をするとか、予定を決めない日々を送るとか、香港で治安の悪い地域に住むとか、すすんで迷子になるとか。しかしそんなものはすでに習慣になつてしまつた性癖のようなもので、冒険というほどのことではない。

冒険というのは北極や南極へ行くとか、エベレストに登るとか、そんなレベルを言うのではないか。

まあしかし、他の項目についてはすべてびたりと当てはまつているのだから、一応真摯しんしに耳は傾けようと思う。

冒険は絶対にいけません。肝に銘じます。

先生にぜひとも確認しておきたいことがあつた。馬のことだ。

古田先生に会うまでの二日間、馬との接触は必死に我慢してきた。ここは自動車の運転を覚え

るための学校だから、生徒が好き勝手に馬に乗るわけにはいかない。担任の先生から許可をもらい、先生を通して厩舎に予約を入れてもらわなければならぬのだ。

「先生、馬にはいつ乗っていいんでしょうか？」

「馬？ 星野さんは馬が好きとね？」

「大好きです。午年生まれだし。しかも、泣く子も黙る丙午ひつえまですよ。第一、馬がいるからここに来たんです」

「いつでも乗ってよかよ」

先生はそう言いながら、赤ペンや蛍光ペンで色とりどりになった私の教習計画書を手にとった。「しかし星野さんはけっこう忙しかね……今日はびっしり入っとる。お、明日の二時が空いとるね。ここにしよう。わしから予約入れとくけん」

「先生、事務所の掲示板に『乗馬は三回までとさせていただけます』って書いてあったんですが、あれは本当ですか？」

「ああ、あれは建前じゃ。混みあう時期にみんな平等に乗れるように、つちゆう意味。ばってん、ほとんどの生徒は一、二回しか乗らんね」

「なんで！ もつたいなら」

「いまはすいとるけん、何回乗ってんよかよ」

しめしめ……古田先生から「何回乗ってもよい」というお墨付きを頂いたぞ。話はしてみるものだ。

ちなみに、「話はしてみるものだ」というのは、私の母の口癖だ。たとえば八百屋に行つて、目当ての大根が見当たらない時、「話をしてみる」。すると奥から大根が出てくる。懇意にしている魚屋でも、親父さんに「話をしてみる」。すると奥から、とびきり活きのよいナカオチが出てくる。私にも次第に、下町のおばさんの凶々ずずしさが身に着いてきたのかもしれない。

しかしそれも、思ったほど居心地の悪い感じではない。

島へ免許を取りに行く
星野博美 著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,500 円（本体）+税
ISBN 978-4-7976-7238-1

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ!](#)